

小学校家庭科における 「主体的・対話的で深い学び」の視点に立った授業の提案 —第6学年家庭科「衣生活」「食生活」を中心に—

長谷川 えり子¹

要旨

豊かで便利な日常生活の中で、児童は、自分から問う・疑問を持って調べる・試してみる等の姿勢は弱く、問題解決能力を身に付けることが難しくなっている。このような中、学校の授業では、自分の考えを話す・書く、相手の考えや経験などを聞く・考える・調べる等の「探究的・活動的な学習」を通して、自分の考えを深める力をつけることが求められている。

本稿では、小学校家庭科における「主体的・対話的で深い学び」の視点に立った「衣生活」と「食生活」における授業例を挙げ、考察する。「生活に関連した学習課題」を提示し、自分たちが考えた実験や調理実習をする「体験的な学習」の中に「グループ学習・ペア学習」「ペア・グループでの学びを全体に交流」「ワークシートへの記入・振り返り」を取り入れた授業を提案する。

このような授業を「家庭科ならではの物事を捉える視点や考え方」を理解した上で、「単元や題材など内容や時間のまとまりの中で行うことを考える」には、教師の専門性・力量・経験等が大きく関わってくる部分がある。しかし、この視点に立った授業を参観し、授業例を立案し模擬授業・授業を重ねることにより教師の力量は大きくアップする。また、「探究的・活動的な学習」を積み重ねることにより、児童は、主体的に思考し、積極的に実践する態度や能力を育み、この態度・能力を自分の生活・その後の学習に生かすことができると考える。

キーワード 家庭科 主体的・対話的で深い学び 学習指導要領

1. 緒言

電子機器に囲まれた知識偏重の社会の中で、便利な生活・消費生活が当たり前のように暮らしてきた子どもたちは、自分の体験をもとに、自分独自の自由な発想で試行錯誤するという経験が乏しく、日常生活の中で問題解決能力を獲得することが難しくなっている。

常に子どもの周りにはたくさんの情報があふれ、次から次へと新しい商品が出回り、時間をかけて考える・自分から苦勞して作るということはほとんどない。努力しなくても豊かに生活できる、恵まれた生活を送ることができる環境にある。

現在の子どもは、周りですでに用意されている・周りから教えられ助けられるという生

¹ 津市白塚公民館

活に慣れてきているために、自分から問う、自分から疑問を持って調べてみる・試してみる、自分の力で作ってみる等の姿勢はかなり弱いと言える。

そのような中、学校の授業では、自分の考えや意見、経験や思いを話すこと、書くこと、相手や他の児童の考えや経験などを聞き、さらに考え、これらをもとに試行錯誤しながら作る・調べる等の学習を通して、自分の考えをさらに深めていく力をつけることが求められている。

言語活動を重視し、探究的・活動的な学習を大切にし、授業の工夫を図り、知識や技術を主体的に活用する力、主体的に思考し、積極的に実践する態度や能力を育むことに重点を置いて進めてきた授業研究をもとに、小学校家庭科における「衣生活」と「食生活」における「主体的・対話的で深い学び」の視点に立った授業例を挙げ、考察する。

この授業の中で、子どもたちは、生活に関連する学習課題に向かい、ペアまたはグループで考え、話し合ったことをもとに、実際に実験・実習・調査等をする。その中での気づき・学びをワークシートに記述することにより、自分の考えの道筋や足あとを明らかにし、振り返り、さらに、ペアでの学び・グループでの学びを交流することによって、より深い学びとする。これらにより学び、身につけた力は、他の学び・場面でも同じように活用でき、自分の生活に生かし、確かな力としていくことができると考える。

2. 「主体的・対話的で深い学び」について

2.1. 「主体的・対話的で深い学び」が求められている背景と状況

今回の学習指導要領の改訂は、「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領の改善及び必要な方策等について（答申）（中教審第197号）」（平成28年12月21日）を踏まえ、その「基本方針」に基づき行われ、「学習指導要領（平成29年告示）解説 家庭編」（平成29年7月）の「第1章 総説」「1改訂の経緯及び基本方針（2）改訂の基本方針」⁽¹⁾にあるように、「教育課程全体を通して育成を目指す『資質・能力』は、『何を理解しているか、何ができるか』『理解していること・できることをどう使うか』『どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか』の三つとし、各教科の目標や内容についても、「生きて働く『知識・技能』の習得」「未知の状況にも対応できる『思考力・判断力・表現力等』の育成」「学びを人生や社会に活かそうとする『学びに向かう力・人間性等』の涵養」の三つの柱に基づいて、再整理を図るよう提言されている。

今後は、「『知識・技能』が生きて働くように」「『思考力・判断力・表現力』が未知の状況にも対応できるように」「『関心・意欲・態度』は学びを人生や社会に活かそうとする『学びに向かう力・人間性』となるように」と提言されているのである。

このため、「学習指導要領（平成29年告示）解説 家庭編」（平成29年7月）の「第1章 総説」「1改訂の経緯及び基本方針（2）改訂の基本方針」⁽¹⁾の中で、「子供たちが、学習内容を人生や社会の在り方と結び付けて深く理解し、これからの時代に求められる資質・能力を身に付け、生涯にわたって能動的に学び続けることができるようにするためには、これまでの学校教育の蓄積を生かし、学習の質を一層高める授業改善の取組を活性化していくことが必要であること、我が国の優れた教育実践に見られる普遍的な視点である『主体的・対話的で深い学び』の実現に向けた授業改善（アクティブ・ラーニングの視点に立

った授業改善)を推進することが求められる。」と提言されている。

従来より蓄積してきた「一人一人の子どもに応じた『わかる授業』」「基礎・基本を確実に習得させること」「体験的・問題解決的な学習を行うこと」を基盤として、「生きて働く『知識・技能』」「未知の状況にも対応できる『思考力・判断力・表現力等』」「学びを人生や社会に活かそうとする『学びに向かう力・人間性等』」の三つを身に付けるために、アクティブ・ラーニングの視点に立った授業改善である『主体的・対話的で深い学び』の実現に向けた授業改善を行うことを目指すとされている。

実際、ここ何年間かの際に、全日本中学校技術・家庭科研究大会、東海・北陸地区中学校技術・家庭科研究大会および三重県津市内小学校における授業研究において、『主体的・対話的で深い学び』の実現に向けた公開授業・提案授業により、これらの力を身に付ける実践を行ってきた。実生活に関連した身近な学習課題・児童生徒が考えてみたくなるような学習課題・教科等ならではの物事を捉える視点や考え方を踏まえた学習課題を提示することにより、児童生徒が身を乗り出して課題に取り組もうとする意欲や姿勢、ペアやグループで意欲的かつ主体的に学ぶ・問題解決しようとする学習の姿勢・態度が見られ、また、ワークシートに自分の考え・気づき・学びを記入し振り返ること、ペアやグループでの気づき・学びを全体に交流することにより、より深い学びとなっている姿が見られた。これらは、今回の学習指導要領の改訂が目指すところが実現できる・児童生徒の確かな力となっていくのではないかと手応えを感じている。

2.2. 小学校家庭科における「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善の推進

「学習指導要領(平成29年告示)解説 家庭編」(平成29年7月)の「第1章 総説」「1改訂の経緯及び基本方針」の「(2)改訂の基本方針 ③「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善の推進」に、次のように示されている⁽²⁾。

各教科等の「第3節 指導計画の作成と内容の取り扱い」において、単元や題材など内容や時間のまとまりを見通して、その中で育む資質・能力の育成に向けて、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を進めることを示した。

その際、以下の6点(ア～カ)に留意して取り組む事が重要である。

この研究レポートの「3. 小学校家庭科『衣生活』『食生活』における『主体的・対話的で深い学び』の視点に立った授業例」は、その6点(ア～カ)のうち、次にあげる5点(ア～オ)に留意した⁽³⁾。

- ア 児童生徒に求められる資質・能力を育成することを目指した授業改善の取組は、既に小・中学校を中心に多くの実践が積み重ねられており、特に義務教育段階はこれまで地道に取り組まれ蓄積されてきた実践を否定し、全く異なる指導方法を導入しなければならないと捉える必要はないこと。
- イ 授業の方法や技術の改善のみを意図するものではなく、児童生徒に目指す資質・能力を育むために「主体的な学び」、「対話的な学び」、「深い学び」の視点で、授業改善を進めるものであること。
- ウ 各教科等において通常行われている学習活動(言語活動、観察・実験、問題解決的

な学習など)の質を向上させることを主眼とするものであること。

エ 1回1回の授業で全ての学びが実現されるものではなく、単元や題材など内容や時間のまとまりの中で、学習を見通し振り返る場面をどこに設定するか、グループなどで対話する場面をどこに設定するか、児童生徒が考える場面と教師が教える場面をどのように組み立てるかを考え、実現を図っていくものであること。

オ 深い学びの鍵として「見方・考え方」を働かせることが重要になること。各教科等の「見方・考え方」は「どのような視点で物事を捉え、どのような考え方で思考していくのか」というその教科等ならではの物事を捉える視点や考え方である。各教科等を学ぶ本質的な意義の中核をなすものであり、教科等の学習と社会をつなぐものであることから、児童生徒が学習や人生において「見方・考え方」を自在に働かせることができるようにすることにこそ、教師の専門性が発揮されることが求められること。

そして、「学習指導要領（平成29年告示）」（平成29年3月告示）「第8節 家庭」の「第2 各学年の内容 1 内容」「B 衣食住の生活」には、次のように示されている⁽⁴⁾。（次節で、筆者が考案し、提案する授業例に関わる部分に、下線_____を付した。）

次の(1)から(6)までの項目について、課題を持って、健康・快適・安全で豊かな食生活、衣生活、住生活に向けて考え、工夫する活動を通して、次の事項を身に付けることができるよう指導する。

(2) 調理の基礎

ア 次のような知識及び技能を身に付けること

(エ) 調理に適したゆで方、いため方を理解し、適切にできること。

イ おいしく食べるために調理計画を考え、調理の仕方を工夫すること。

(4) 衣服の着用と手入れ

ア 次のような知識及び技能を身に付けること

(ア) 衣服の主な働きが分かり、季節や状況に応じた日常着の快適な着方について理解すること。

さらに、「第3章 指導計画の作成と内容の取り扱い」の「1 指導計画作成上の配慮事項」「2 内容の取り扱いと指導上の配慮事項」には、次のように示されている⁽⁵⁾ ⁽⁶⁾。（次節で、筆者が考案し、提案する授業例に関わる部分に、下線_____を付した。）

1 指導計画の作成に当たっては、次の事項に配慮するものとする。

(1) 題材など内容や時間のまとまりを見通して、その中で育む資質・能力の育成に向けて、児童の主体的・対話的で深い学びの実現を図るようにすること。その際、生活の営みに係る見方・考え方を働かせ、知識を生活等と関連付けてより深く理解するとともに、日常生活の中から問題を見いだして様々な解決方法を考え、他者と意見交流し、実践を評価・改善して、新たな課題を見いだす過程を重視した学習の充実を図ること。

2 第2の内容の取り扱いについては、次の事項に配慮するものとする。

- (1) 指導に当たっては、衣食住など生活の中の様々な言葉を実感を伴って理解する学習活動や自分の生活の課題を解決する言葉や図表を用いて生活をよりよくする方法を考えたり、説明したりするなどの学習活動の充実を図ること。

これらを踏まえて、次節では、小学校家庭科「衣生活」「食生活」における「主体的・対話的で深い学び」の視点に立って考案した授業例を提案する。

3. 小学校家庭科「衣生活」「食生活」における「主体的・対話的で深い学び」の視点に立った授業例

「学習指導要領（平成29年告示）」（平成29年3月告示）「第2章 家庭科の目標及び内容」「第1節 家庭科の目標」に、次のように示されている⁽⁷⁾。（筆者が考案し、提案する授業例に関わる部分に、下線_____を付した。）

小学校家庭科の目標は、次のとおりである。

生活の営みに係る見方・考え方を働かせ、衣食住などに関する実践的・体験的な活動を通して、生活をよりよくしようと工夫する資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

- (2) 日常生活の中から問題を見いだして課題を設定し、様々な解決方法を考え、実践を評価・改善し、考えたことを表現するなど、課題を解決する力を養う。

衣食住などに関する実践的・体験的な活動を通してとは、家庭科における学習方法の特質を述べたものである。具体的には、衣食住や家族の生活などの家庭生活に関する内容を主な学習対象として、調理、製作等の実習や観察、調査、実験などの実践的・体験的な活動を通して、実感を伴って理解する学習を展開することを示している。

本稿では、この「調理、製作等の実習や観察、調査、実験などの実践的・体験的な活動を通して、実感を伴って理解する学習」として、「A 家庭・家庭生活」「B 衣食住の生活」「C 消費生活・環境」の3つの内容のうちの「B 衣食住の生活」の「衣生活」「食生活」の題材・内容から、第6学年で学習する2.1.及び2.2.の授業例を提案する。

3.1. 「快適な着方」ーグループ学習による話し合いと実験・調べ学習ー

普段、身に付ける衣服「体操服」の性質「汗（水）の吸いやすさ」について、グループ学習で確かめる方法（実験・調べ学習等）を話し合い、各グループで考えた簡単な実験や調べ学習をもとに確かめ、発表・交流する授業例である。

第1時	○「体操服は汗（水）をよく吸うのか」の学習課題について、確かめる方法をグループで話し合う。	・体育の授業や運動会で、体操服を身に付けるのは、汗をよく吸うからと言われていたが、本当に「体操服は汗（水）をよく吸うのか」について、4人グループで、これについて調べる方法（簡単な実験・調べ学習等）を考え
-----	---	---

		る。
第 2 時	○各グループで考えた「学習課題を確かめる方法（簡単な実験・調べ学習等）」を行う前に、予想を立て、ワークシートに記入してから、実験等を行う。	<p>①ビーカーに水を入れ、「体操服」「大人のブラウス（ポリエステル等）」の2種類の細い帯状の布の端を水に浸して、吸い上げる実験</p> <p>②「体操服」「大人のブラウス（ポリエステル等）」の2種類の布にスポイドで同じ量の水滴を垂らして、水が浸み広がる様子を実験</p> <p>③ネット検索をして、「体操服」「大人のブラウス（ポリエステル等）」の2種類について、水の吸いやすさを調べる等</p> <ul style="list-style-type: none"> ・グループで考えた実験等に必要な布・用具等は教師が用意する。 ・ワークシートには、「学習課題」「確かめる方法（簡単な実験方法等）」「予想」を記入する。
第 3 ・ 4 時	<p>○「実験・調査結果」「結果からわかること」をワークシートに記入する。</p> <p>○各グループで、「学習課題」「実験・調査方法」「予想」「結果」「結果からわかること」を発表する準備をする。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・課題を解決する鍵となる言葉や結果を図表等を用いて、各グループのホワイトボードにわかりやすく書いて、発表できるようにする。
第 5 時	<p>○3グループが発表する。</p> <p>○「体操服は汗をよく吸うのか」の学習課題についてまとめる。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・異なる実験方法で確かめたグループ、ネット検索で調べたグループが発表する。 ・発表からわかることを交流し、ワークシートに記入する。
第 6 時	○教科書の内容から、「快適な着方」についてまとめる。	<p>○「そでの長さ」「えりやそで口の開き方」「布の手ざわり・厚さ・水の吸いやすさ・</p> <p>風の通し方」「色」「帽子やくつ」について教科書の内容により確認する。</p>

3.2. 調理実習「いろいろいため」ーペア学習による実習計画と調理実習ー

ペアで「いろいろいため」を「いろいろのよい野菜いためにする」ために、「野菜など（材料）の種類」「野菜など（材料）の切り方」「いためる順番」「火加減」等を話し合い、調理をする授業例である。

第1時	○「いろいろいため」を「いろいろのよい野菜いためにする」ために、「①野菜など（材料）の種類、②切り方、③いためる順番、④火加減、⑤そのほかに工夫することなど」の実習計画をたてる。	・ペアで、①②③④⑤について話し合い、ワークシートに記入する。
第2・3時	○ペアで実習を行い、ワークシートに気づいたことを記入する。	・計画を立てた内容以外に、⑤切り方の厚さ・形、⑥材料を入れるタイミング、⑦いため具合などについて、自分の気づき、ペアで確認した気づき等を記入する。
第4時	○ペアで、「調理計画」（第1時）、「実習時の気づき」（第2・3時）、「調理計画の見直し」等について、発表の準備をする。	・課題を解決する気づきを、鍵となる言葉・結果について、図等を用いて、ペアのホワイトボードにわかりやすく書いて、発表できるようにする。
第5・6時	○2～3つのペアが発表する。 ○「いろいろいため」の②野菜の切り方③いためる順番④火加減について、まとめる。 ○調理の計画を見直し、ワークシートに記入する。	・ワークシートに記入された①～⑦について、異なる気づきをした2～3つのペアに発表させる。 ・発表したペアの内容と教科書の記述をもとに、ワークシートにまとめる。 ・教科書を参考に、ペアで、調理の計画を見直し、ワークシートに記入する。

4. 考察

この2つの授業例を実際に行った場合、全日本中学校技術・家庭科研究大会、東海・北陸地区中学校技術・家庭科研究大会および三重県津市内小学校における授業研究より、次の(1)～(5)を授業に取り入れることによって、下記に述べるような力がつき、学習成果が上がるのではないかと考える。

(1) 実生活に関連した学習課題

実生活に関連した身近な学習課題を明確に提示することにより、「なぜだろう」「本当にそうなのだろうか」「それを達成するには、何をどのようにしたらいいのか」「そのことを確実に説明するには、何をどのように確かめたらよいのだろうか」と、子どもたちの学びに向かう意欲・動機づけの興味を持たせることができる。

また、学習過程の途中で、答えがわからなくなった時、さらに進めていく方向や答えに迷う時には、「何を解決するために、この学習を進めているのか」「何を見つけるために、この方法のどこに着目しようとしていたのか」等、学習課題に戻り、学習の目的を再度確かめながら、模索し、追求していくことができるようになる。

(2) グループ学習・ペア学習

全体学習の中では、他の児童の発表や意見を聞くだけに終わり、自分の考えを発言することが苦手な児童でも、グループの中では、人数が少ないがために、発言する機会・発言を求められる場合があるため、自ずとしっかりと考え、また、相手に理解してもらうために、自分の考えをまとめ表現しようと努力することになる。また、グループ内の1人1人の意見をしっかりと聞かなければ、自分の考えを明確にし、練ることができないので、自ずとしっかりと聞くことができるようになる。

調理実習では、4人のグループでは、事前に、誰がどの作業をするかの調理計画を立てたとしても、調理が得意な児童がリーダーシップを取ることが多く、難しい作業は得意な児童に頼ったり任せたりして、調理が苦手な児童は、後片づけなどの簡単な作業にまわることが見られる。しかし、ペアであれば、苦手な作業であっても、自分がしなければ、調理が進んでいかないので、調理が苦手な児童も難しい作業をせざるを得ないことになる。これにより、失敗や成功も含めて経験を重ねることになり、また、より上手に調理をするために、ペアで手本を見せたり教え合ったりすることも出てくる。

(3) ワークシートへの記入

ワークシートに学習課題を記入し、明確にすることにより、すべての学習過程で、「何のために」「何を考え」「何を確かめるのか」と、明確な目的を持って学習に取り組むことができる。

また、学習過程ごとに、自分の考え・気づき・確認したこと等を記録することにより、その都度、場面ごとに、自分の考え・気づき・確認したこと等を振り返りながら学習を進めることができる。また、今までの学習内容・学習過程を確認したうえで、次の学習過程に進み、取り組むことができる。

(4) 体験的な学習

自分たちで考えた方法により簡単な実験や調理実習をすること、自分の目と手で確かめ、気づき、発見・解決したことは、教師や友だちから聞いたり教えてもらったりすることより、はるかに大きな実感として感じとり、心に残る学びとなる。その後の同じような学習や生活の場面においては、そこでの学びを確かな知識・力・自分の考えとして活かすことができる。

(5) ペア・グループでの学びを全体に交流

自分の気づき・学んだことを伝えるために、より聞き手に理解しやすいように、図表等を用いてまとめ、伝える相手にわかりやすく発表することは、自分の学びを再認識するとともに、より確実な学びとなって残るものである。また、反対に、他のペア・グループの学びや気づきを聞くことは、単に、その学習内容を聞くだけではなく、自分たちの気づきや学びと比較しながら、同じ部分や違いに目を向けて聞くことができ、より深い学びとなる。

以上の(1)～(5)については、各教科等において通常行われている学習活動(言語活動、観察・実験、問題解決的な学習など)の質の向上と言える。中でも、(1)(4)については、小学校家庭科の授業では、特に、実生活に直結する、将来にわたって活用できる力を育む教科の特性、および、小学校家庭科でつけたい力の向上のために、大切にしたい点である。

「学習指導要領(平成29年告示)解説 家庭編」(平成29年7月)の「第1章 総説」の

「2 家庭科改訂の趣旨及び要点」「(1) 改訂の趣旨」に、次の点が記述されていること（特に着目する点に、下線_____を付した）から、小学校家庭科において重要な点であると言える⁽⁸⁾。

(1) 改訂の趣旨

ア 平成20年度改訂の学習指導要領の成果と課題をふまえた家庭科、技術・家庭科の目標の在り方

資質・能力については、実践的・体験的な学習活動を通して、家族・家庭、衣食住、消費や環境等についての科学的な理解を図り、それらに係る技能を身に付けるとともに、生活の中から問題を見いだして課題を設定し、それを解決する力や、よりよい生活の実現に向けて、生活を工夫し創造しようとする態度等を育成することを基本的な考え方とする。

しかし、このような「主体的・対話的で深い学び」の視点に立った授業を全ての題材で毎時間行うことは、時間的にも不可能であり、題材によっては難しく、学習効果も上がらない。

前述の1.2.に挙げた次の2点（エ、オ）については、教師の専門性・力量・経験等が大きく関わってくると考える。

エ 1回1回の授業で全ての学びが実現されるものではなく、単元や題材など内容や時間のまとまりの中で、学習を見直し振り返る場面をどこに設定するか、グループなどで対話する場面をどこに設定するか、児童生徒が考える場面と教師が教える場面をどのように組み立てるかを考え、実現を図っていくものであること。

オ 深い学びの鍵として「見方・考え方」を働かせることが重要になること。各教科等の「見方・考え方」は「どのような視点で物事を捉え、どのような考え方で思考していくのか」というその教科等ならではの物事を捉える視点や考え方である。各教科等を学ぶ本質的な意義の中核をなすものであり、教科等の学習と社会をつなぐものであることから、児童生徒が学習や人生において「見方・考え方」を自在に働かせることができるようにすることにこそ、教師の専門性が発揮されることが求められること。

各教科等の「見方・考え方」（上記のオ）の「どのような視点で物事を捉え、どのような考え方で思考していくのか」、「その教科等ならではの物事を捉える視点や考え方」については、教師自身が教材研究を重ね、授業の経験を積むことにより、その教科・題材の「見方・考え方」が理解できていくことは否めない。

教師自身の深い教材研究をもとにして、どの題材のどの内容を取り上げ、どのような学習課題をどのように設定するのか、その学習課題に向かって、児童は、どのような手段で、どのような道筋で、どのように考えようとするのか、どう解決しようとするのかを見極める力は、全日本中学校技術・家庭科研究大会、東海・北陸地区中学校技術・家庭科研究大会および津市内各小学校における各教科の授業研究・事例検討会の積み重ねから、教師の専門性・力量・経験等により大きく左右される部分があることも見えてきた。

これは、上記の（エ）についても同じである。「単元や題材など内容や時間のまとまりの中で、学習を見直し振り返る場面をどこに設定するか、グループなどで対話する場面をどこに設定するか、児童生徒が考える場面と教師が教える場面をどのように組み立てるかを考え、実現を図っていくこと」についても、同様に、教師の専門性・力量・経験等に大きく関わってくると言える部分がある。

しかし、この「主体的・対話的で深い学び」の視点に立った授業をいくつか参観し授業例を立案し模擬授業を体験すること、授業を組み立て、実際に授業をすることにより、授業経験が浅くても、教師の力量は大きくアップする。

そして、この「探究的・活動的な学習」を積み重ねることにより、主体的に思考し、積極的に実践する態度や能力を育み、この態度・能力を自分の生活およびその後の学習に生かすことができると考える。

5. 結語

学習指導要領の改訂により、自分の考えや意見、経験や思いを話すこと、書くこと、相手や他の児童の考えや経験などを聞き、さらに考え、これらをもとに試行錯誤しながら作る・調べる等の学習を通して、自分の考えをさらに深めていく「主体的・対話的で深い学び」となる授業が求められ、研究が進められている。

本稿では、言語活動を重視し、探究的・活動的な学習を大切にし、授業の工夫を図り、知識や技術を主体的に活用する力、主体的に思考し、積極的に実践する態度や能力を育むことに重点を置いて進めてきた中学校技術家庭科、小学校各教科の授業研究をもとに、小学校家庭科における「衣生活」と「食生活」における「主体的・対話的で深い学び」の視点に立った授業例を挙げ、考察した。

豊かな生活の中で育ってきた子どもたちは、自分の体験をもとに、自分独自の自由な発想で試行錯誤するという経験が少なく、日常生活の中で問題解決能力を獲得することが難しくなっている現状がある。しかし、「主体的・対話的で深い学び」の視点に立った授業研究・事例検討会の積み重ねから、生活に関連する学習課題に向かい、ペア・グループで考え、話し合い、実際に実験・実習・調査等をする体験学習を通して、ペア・グループでの気づきや学びを全体に交流することにより、深く学び、他の学びや場面で活用し、自分の生活に生かし、確かな力としていけることがわかってきた。

今後は、小学校家庭科第5・6学年の「A 家族・家庭生活」「B 衣食住の生活」「C 消費生活・環境」の3つの内容において、どの題材のどの点について、「主体的・対話的で深い学び」の視点に立った授業をどのように行うのか、「主体的・対話的で深い学び」の視点に立った授業を、小学校家庭科第5・6学年のすべての内容のどこに位置づけることが、より有効かつ効果的であるのかを、授業例の立案と模擬授業を重ねることにより、研究を進めていきたい。

引用文献

文部科学省（2017）：小学校学習指導要領解説 家庭編 第1章 総説：3-4

文部科学省（2017）：小学校学習指導要領解説 家庭編 第1章 総説：4

- 文部科学省（2017）：小学校学習指導要領 第2章 各教科 第8節 家庭：137-138
- 文部科学省（2017）：小学校学習指導要領解説 家庭編 第3章 指導計画の作成と内容の取り扱い：71
- 文部科学省（2017）：小学校学習指導要領解説 家庭編 第3章 指導計画の作成と内容の取り扱い：77
- 文部科学省（2017）：小学校学習指導要領解説 家庭編 第2章 家庭科の目標 第1節 家庭科の目標：12-13
- 文部科学省（2017）：小学校学習指導要領 解説 家庭編 第1章 総説：5-6

**Suggestion on Elementary School Home Economics Class
From the Viewpoint of “Autonomous, Interactive,
and Deep Learning”
— Focus on “Clothing Life” and “Food Life” of Sixth Grade
in Elementary School in Japan**

Eriko HASEGAWA